

綴葉

ていよう

'25 4

No. 436

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

田中ゆかり著『「方言コスプレ」の時代 ニセ関西弁から龍馬語まで』
児島青著『本なら売ほど』

特集／対話

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel:771-6211 / E-mail:ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyoku/public_relations/



UNIV 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

「方言」のコミュニケーション戦略としての「方言」

「方言コスプレ」の時代

二七 関西弁から龍馬語まで

田中ゆかり著
岩波現代文庫



《自分、めっちゃおもろいじゃん》
さて、右のごとはほんんな人がしゃべっているだろうか。快活な人？ 少し怖い人？ それとも笑いを求める、いわゆる三枚目？

このように私たちは、知らず知らずのうちにある方言に対して何かしらのイメージを形成している。特に小説や漫画、ドラマやアニメといった仮想の——現実ではない空間では、「共通語」を無標の言語変種としたときに有標となる「方言」がその言語使用者に「役割」を与えるという。多くの主人公が共通語を使い、関西弁を喋るキャラはトリックスターとして振る舞っていることに気づいただろうか。本書はここから発展する「方言コスプレ」を取り扱い、日本語社会における「方言」に対する意識の変化を詳述する。

仮想のごとはを用いてキャラクターを着脱する、「ごとは」のコスチューム・プレイ。特に「方言」を用いてそれに付随するイメージを臨時的な「キャラ」として繰り返すこと。本書はこれを「方言コスプレ」と定義する。ここで重要なのが、それがホンモノである必要はないこと。なんとなく皆がイメージする「○○方言らしき」を感じられたらよいのである。ごとはの断片の「らしき」が、その方言の話し手や地域のイメージを喚起させる。だが、あくまでイメ

ージだという点には注意しなければならない。私たちは、事実ではなく、「方言ステレオタイプ」を共有しているのだ。その上でこれをコミュニケーションストラテジーの一つとして使用している。

この「方言コスプレ」の成立と発展は、日本語話者の方言の捉え方の変化と一体である。前提として、テレビ放送の普及によりほとんどの人が「共通語」を使用できるようになり、生育地域の方言と共通語を使い分けられる時代になったことが指摘されている。過去には「恥ずかしい」と思われていた方言が、今では個性の一つとしてポジティブに捉えられるようになった。この意識変化の先に、楽しむものとしての方言、「方言コスプレ」が成立するという。そしてその発展にもヴァーチャル空間での言語使用の影響は大きい。本書が特に注目するのがNHKの大河ドラマ、『龍馬伝』放送後に、男らしさの表現として「ヴァーチャル高知方言」の使用が急浮上したという指摘が興味深い。ドラマにおける方言の取り扱いを方言に対する大衆の意識変化と関連づけるアプローチは本書の魅力だ。

当然ながら「方言」に対する意識には地域差がある。そしてそれは「方言コスプレ」に対する意識の違いにも繋がる。本書の調査結果は、関西弁使用地域のような「方言主流社会」では、どのような場面でも方言使用率が高い一方で、「方言コスプレ」の受容レベルは低いことを示している。円滑なコミュニケーションを目指して使るといふことだ。できれば避けたい。だが他者の方言に対する意識はなかなかわからない。であれば、本書は一読に値する。(ひるね)

(四三〇頁 税込二六五〇円 10月刊)

人と人が古本を介して

本なら売れるほど

児島青著

KADOKAWA



古本オタクとして見逃せない漫画が出た。

脱サラをして古本屋「十月堂」を開いた若い兄ちゃんが本書の主人公（古本屋店主なのに高身長イケメンなのが「けっ」という感じだが、まあ許す）。街の小さな古本屋が閉業することを知った彼は自分が代わりにその街で古本屋を始めようことを決意する。「嫌なんです。この街から古本屋がなくなるのが。……」この先、俺みたいな奴はどこでサボればいいんですか？ 紙の本が好きで、埃くさい古本屋でしか満足できない、そういう人間の行く場所を残したい。

十月堂には色々なお客さんが訪れる。常連の小泉さんとは、エイモス・チュツオーラ『やし酒飲み』について語り合う。澁澤龍彦と三島由紀夫を愛読する文学少女の牟礼マリには、B.Lチックな森茉莉『恋人たちの森』をおすすめする。蔵書家の本棚作りを手伝った影響で本に興味を持ち始めた田部は、いきなり『カラマゾフの兄弟』に挑戦する。着物を愛する橋本さんは、岡本綺堂『平七捕物帳』を読み、その艶やかな着物の描写にうっとりする。こうして並べるとうわかるように、出てくる本がなかなかシブい。そしてそれがいい。

古本屋の大事な仕事のひとつが買取。第一話「本を葬送る」では、故人の蔵書の買取が依頼される。生涯独身だった故人の家には所狭

しと本が積まれている。しかし時間はない。明日には清掃業者がきてすべてを捨ててしまう。売れる本と売れない本を見極め、素早く処理していくが、無情にも日は暮れていく。電気はもう通っていない。本が見えなくなっていく。「くそ……この人の人生が……ああ……見えなくなる……」。本を整理すること、それはその持ち主の人生に触れることでもある。古本屋の楽しさと辛さはそこにある。

古本屋のもうひとつの大事な仕事は処分だ。「素敵なお仕事ですね。本当に本がお好きなんですね」。そう言われるが、実際はどうか。「日が暮れて店を閉めたら、もうひとつ大事な仕事が残っている」。不良在庫となった本を縛り、リサイクルステーションに持っていく。そして、投げ捨てる。本好きとしては辛い光景だが、これがないと本の世界は成り立たない。常連の小泉さんは言う。「誰も読まなくなった本は、いつか誰かが終わらせなきゃいけないしね」。随所に散りばめられた小ネタも面白い。たとえば新潮文庫当てクイズ。これは背表紙を見せない状態で、いくつかの文庫のなかから新潮文庫はどれかを当てるといふもの。答えの導き出し方はとても簡単。天アンカットなのはハヤカワ文庫、岩波文庫、新潮文庫など。そのなかでスピン（葉）が付いているのは新潮文庫のみ。だからスピン付き天アンカットを見つけたら、それが答えだ。こういうほとんど役に立たない知識を人に見せつけているときが一番楽しい。

こうして本書では、本を介して人と人が交わることの意味が描かれる。久しく漫画から離れていたが、いいものを読んだと素直に思える作品だった。二巻も近々出るらしい。今から楽しみだ。（はや）

（一九四頁 税込七九二円 1月刊）

〈特集〉 対話

私たちは今、分断の時代を生きている。容赦のない暴力が、無辜の民から故郷と命を奪う。戦火を免れている地でも、匿名の声が人を死に追いやっている。そんな中、対立を平和的に解決するための手段として「対話」がある、とされている。

しかし、そんな都合よく「対話」が成立するのだろうか？ SNSはおろか、目の前にいる人とさえ、私たちは齟齬をきたしてばかりいるのに。「対話」ができたとして、それは本当に、大規模な紛争の解決に役立つのだろうか？ 既に暴力は振るわれてしまっているというのに。そしてそもそも、「対話」という耳心地の良い言葉は、一体何を指しているのだろうか？ 疑えばこそ、私たちは知ろうとしなければならない。(朝露)



同じ方向を向いているはずなのに伝わらない

対話を一言で説明することは難しい。ひとまずの定義として、立場や価値観の異なる者同士が、相互に言葉を交わすことで、双方が何かを達成することを目指す試みとしたい。

注意しておきたいのが、単なる言葉の応酬、情報の伝達のみが対話の目的ではないということだ。しかし厄介なことに、対話が必要な場面においてはそれすらままならず、容易に「すれ違い」が生じてしまう。どうすれば自らの言葉を伝えられ、他者である相手の言うことを受け止めることができるのだろうか。

身近でミクロな具体例から見よう。例えば医師と患者という関係において対話是不可欠だ。傷や病気の治療という同一の目的を共有しておりスムーズなコミュニケーションが期待されるが、知識の差、あるいは立場の違いゆえに、時に誤解や衝突が生じる。『患者の話は医師にどう聞かせるのか』（みすず書房）は、医療現場における対話の重要性を痛切に訴えてくる。診察時のディスコミュニケーション・セッションの実態、医療技術としての対話の

軽視、医療ミスが発生した際の謝罪の意義など



と多数の実例が紹介される。著者自身現役の医師であり、自らの失敗が赤裸々に綴られた文章からは、後悔と反省、そして恥を偲んで知を共有しようという意志が感じられる。

対話の困難さを体現している事例を取り上げてみよう。トレーシーは聡明で責任感ある教師だったが、糖尿病を患う。担当医デビッドはトレーシーの優秀さを把握しながらも、自らの指示を守らないトレーシーに事態の深刻さを理解してもらおうと説教じみた指示を繰り返してしまう。次第にトレーシーは診察から遠ざかっていく……。

トレーシーは病気の重大さを当然理解しており、できる限りのことはしていた。では何故治療が進まないのか。診察時のパターンナリスティックな姿勢が原因だ。全ての相談がデビッドにより糖尿病の話へと回収されてしまい、治療を妨げている日常生活の障害が共有されない。非対称な関係性においてはある側面が優秀な側が主導権を握りがちであり、互いが重視している情報が異なるため、対話が困難になってしまうのだ。

◆コミュニケーションを分解する◆
こうしたズレの原因を探るため、認知科学

の力を借りよう。『何回説明しても話が伝わらない』はなぜ起るのか? (日経BP) はスキーマという概念を駆使し、デイスコミュニケーションの原因を認知科学の知見から分解、整理し、解決策を探っていく。

そもそもスキーマとは何か。人間は人それぞれ得てきた知識や言葉の用い方が異なる。こうした「知識の枠組み」や「思考の枠組み」のことをスキーマと呼ぶ。会話とは、話者が話す言葉に込められた意味がそのまま受け手に伝わるものではない。言葉は受け手の解釈というフィルターを通して意味に変換される。スキーマが異なれば話者が意図した意味と受け手の解釈は当然異なる。こうしたスキーマの違いから生じる齟齬を記憶や知識、バイアスといった観点から掘り下げていく。

本書が提示する理路整然としたコミュニケーション論は「すれ違い」の原因を明確にしてくれる。しかし、提示される解決策は少し曖昧だ。スキーマが異なることを理解し、相手の立場に立ったメタ認知をして、感情や合理性の狭間で相手目線のコミュニケーションをしよう。確かにそうだ。だがどうやって?

◆聞くことから始めよう◆

そこで臨床心理士の生きた技術に助けを求めよう。『聞く技術 聞いてもらう技術』(ちくま新書) は対話をテーマにした社会評論が

きっかけとなって生み出された本だ。対話が機能しないのは何故か。相手の発言の裏側を探る「聴く」ではなく、言っていることを真に受ける「聞く」ができていなかったからだ。本書には「聞く」ための技術が詰まっている。言葉遣いだけでなく環境面まで、小手先だがそれゆえ即効性のある技術はきつと役に立つ。対話を始めるためにはまず相手の言葉を引き出し、言葉通り受け取らなければならない。

「対話」で集団間の紛争解決はできるのか?

双方向的な働きかけを必要とする対話は、村内での争いなどの小さな対立から内戦などの大きな対立まで、様々な紛争を解消する方法の一つである。そこで、どのように対話が行われるのか。ここでは世界各地の事例に視野を広げて、対話が紛争を解消した事例について詳しく見ていく。

◆第三者の介入による紛争解決◆

南アフリカでアパルトヘイト政策が廃止された際に、著者が新たな国家建設に貢献してきた経験と、紛争解決における対話の可能性について書かれている『それでも、対話ははじめよう』(英治出版)。当事者ではない人が対話に加わる時、当事者の気持ちを顧みずにながらみの視点で対話を進めしてしまうことは

そうして初めて他者の視点を知り、感情や意味が共有できるのだ。

対話とは一方的に他者を言葉で操ろうという支配の形態ではない。それは互いの立場や経験の差異を意識し、互いの言葉を聞き取るうとする姿勢、反応を見せることで初めて可能になる双方向的なものだ。少なくともミクロナ、私とあなただけの世界だけでも、そうであろうと努力していくべきだろう。(篠)

往々にして起こりうる。本書では、第三者が当事者目線で対話を進める方法について、シンプルであるが忘れられがちな方法論が書かれている。

また、『フィリピン・ミンダナオ 平和と開発』(佐伯印刷)では、古くからの土地に住んでいたムスリムと植民地政府の移民政策によって入植してきたクリスチャンとの間に発生した土地をめぐる紛争において、JICA(国際協力機構)によってもたらされた対話が紛争解決に貢献した流れが書かれている。JICAによる平和構築支援は、「紛争が発生・再発しない強靱な国家建設」を目的として、上と下からのアプローチが取られた。前者は、当該紛争地域に新たな「高度な自治

政府」を充足させること。そして後者は、紛争両当事者に肩入れしすぎることなく、技術支援や地産産業の育成などを通じて協働する場を提供することで、信頼の構築を援助すること。本書では、著者がJICAの職員として紛争両当事者と交渉を重ね、自らに対する信頼を勝ち取るところからこのプロジェクトを成功させた経緯を追う。

対立当事者同士が和解のために歩み寄る。これを実現するために、第三者の介入が効果的である事例は存在する。ただし、それが独りよがりの介入になってしまふこともあるということは忘れてはならない。これまで紹介した二つの事例では、介入者が当事者から見た「他者」であることを踏まえた上で、解決策を提示する上で当事者の意見にも耳を傾ける必要がある。

◆当事者による紛争解決◆

一方で、『紛争をおさめる文化 不完全性とフリコージュの実践』（京都大学学術出版会）では、第三者による介入なしに、対話が当事者によって実践された事例が扱われている。紛争の予防や停止、制御、和解などの広い射程に用いられるアフリカ独自の文化についての論集である。



中でも第四章では、

長老制などにより解決することのできない紛争の当事者が「語る力と聞く力を駆使しつづつ合意を探索し、やがて共存する形を創出する」システム、「パラヴァー」について言及する。裁判や調停とは異なり、このシステムの目的は「シロクロをつける」ことではなく、合意形成に基づく秩序の創出である。人間同士が安定的で固定的な関係を構築することは難しいという前提に立った上で、自らが相手に対話を持ちかけ、他者との関係性を構築する。

三つの事例のうちの一つ、コンゴ人のパラヴァーの実践は、特定の事件について多くの人々が自らの意見を話すことに始まる。調整役という名の、相手を傷つけない程度に批判を加える役割の人物が巧妙なテクニックを使い、人々に語らせるのである。人々の話はやがて事件についてだけでなく、共同体や社会

「対話」の哲学から、未来に向けて

ここまで大小さまざまな対話の具体例から学んできたが、その教訓が語られる際には「他者」という言葉が重要な役割を担ってきた。一人でまくしたてて相手を鎮かせても対話は成立しない。他者との相互的な関係性の上に、対話は成り立つのである。

対しての不満、規範を逸脱した人の話に発展し、共同体が抱える相克が表出される。また、パラヴァーは支配的な権力を行使しようとする一部の年長者たちへの反乱を解決するためにも行われる。そして、会合の最後には参加者全員が感情を爆発させ、互いを祝福しあうという時間を経て、共同体の秩序が再構築されるのである。

ここで重要なのは、ことわざや比喩などを用いながら雄弁に「語ること」の技術、そして個人のモラルとしての「聞く力」である。

これはアフリカの事例にかかわらず、紛争を解決するための対話を行う上で総じて大切にしなければならないポイントなのだ。「他者」を自分とは異なる存在であると認識した上で、互いに対話という真剣勝負を通じて、非決定かつ不可知の他者との共存を目指す。これが、対話の実践である。(フランチ)

対話がこうした性質を持つのは、問題解決の手段として活用されるためなのだろうか。

否、そうではない。ここからは「対話」の本質に迫るべく、「他者との関係」を中心に据えた哲学的探究を見ていこう。

◆「対話」の哲学◆

マルティン・ブーバー。一般に、「二〇世紀前半」という過酷な時代に独自の有神論的実存主義を構築したユダヤ人哲学者」として受容されている。そんな彼の名著二篇が収められた邦訳書の名が、『我と汝・対話』（岩波文庫）である。



〈我―汝〉という関係。表題にもなっているこの概念が、ブーバーの哲学において最も根源的なものである。つまり、〈我〉や〈汝〉単体は〈我―汝〉から派生した概念なのだ。したがって、ここでは近代以降でおなじみの世界観——「私」というものがまず存在し、それが相手を「対象」として経験したり、認識したりする——を捨てる必要がある。もっとも、そのような世界観は有用で、人間の生活や文明に必須のものだ。しかし、ブーバーにおいては根源的でないのである。

では、〈我―汝〉とは何か。それは様々な例を駆使して語られる。例えば、幼児はしばしば目的もなく、漠然とした周囲に向かって手を伸ばし何かを掴み取ろうとする。そこにはまだ「私」と「対象」という意識は存在せず、ただ「関係を結ぶ努力」があるのみだ。こうした姿にブーバーは、根源的な関係としての〈我―汝〉を見て取っている。

ブーバーの著作は詩的な表現が多く、切り取って理解することには限界がある。このあたりで研究書の力を借りつつ、「対話」の概念に触れることで、〈我―汝〉の理解も深まるだろう。『ブーバー対話論とホリスティック教育——他者・呼びかけ・応答』（勁草書房）は、「対話」について現代的な解釈を加えながら以下のように整理している。



ブーバーにとつての「対話」。それは、自らの持つ「物語」——世界を解釈する枠組み——とは異なる、他者の「物語」に触れ、揺さぶられ、言葉を交わし、そして新たに「語り直す」ことだ。他者を、同化も排除もせず他者として受け入れることで、解釈以前のありのままの世界に触れ、かつて持っていた「物語」は変化を余儀なくされるのだ、と。

先述の〈我―汝〉は、この「対話」が成立するような関係、としても理解できるだろう。ブーバーは〈我―汝〉の間に真の世界を、そして「聖なるもの」への道筋を見た。しかし斯くも宗教的でありながら、彼は〈我―汝〉と神秘的な合一を峻別した。それは、相手の存在を肯定しながら、相互に異なる「他者」同士であり続けることが重要だと考えたからである。

◆「対話」で、未来をつくる◆

対話は、眼前の問題を解決する手段に留まらない。本研究書名にもある通り、対話およびブーバー哲学は「教育」にも深く関わり、未来志向の営みだ。曰く、対話的な関わりにおいて人は、「聖なるもの」と繋がった各々のあるべき姿へとその潜在力を方向づけられる。このように人間形成論でもあるブーバーの哲学を本書は、ホリスティック教育という方法論の基盤に位置づけようとした。その試みの全貌は、実際に読んで確かめてほしい。興味深いことにブーバーは、教育における立場の非対称性に警鐘を鳴らしていた。これは本特集第一部の内容とリンクする。また、ブーバー的な理念を踏まえて第一、二部の具体的事例に立ち返れば、教育での実践にも共通するヒントを得ることができそうだ。

こうした繋がりが可能なのは、やはり「対話」の本質が一貫したものだからだろう。相手を自分とは異なる「他者」だと理解すること。その人格を尊重し、話をきちんと聞くこと。そして、相互的な関係を担う者として責任を持って応答すること――。

本特集は、「対話」といういささか便利すぎる言葉の輪郭を明らかにしようと試みてきた。私たちの言葉が読者の皆様が届き、新たな対話を生み出すことを祈っている。（朝露）

新刊コーナー

二十四五

乗代雄介著
講談社

弟の結婚式に出席するために訪れた仙台は、叔母といつか旅行をしようと計画していた場所だった。だから仙台に向かう新幹線で阿佐美景子がヤマシタトモコの『違国日記』の最終巻を手にしていたのも必然だったのだろう。五年前に死んだ叔母に自分が最後に貸したマンガ、この最終巻を叔母が読むことはもうない。

デビュー作『十七八より』から続く、阿佐美景子サーガに連なる一冊。そうとは知らずに本作から読み始めてしまったがこれも悪くない。これは阿佐美景子の、喪失を抱える人間の新たな始まりの物語とも読めるからだ。仙台へ向かう新幹線で突然話しかけてきた女子大生・平原夏葵に『違国日記』の最終巻を差し出したあのとき。あの瞬間から景子と叔母の関係は再び動き出したのかもしれない。

仙台市富沢遺跡保存館は景子が叔母で行く

うとしていたところだ。復元資料を前にスタップの解説が聞こえる。当時の人がどんな言葉を使っていたか、どんな道具を使っていたかはわからない、だから「間違いを描かないために、こんな工夫をするしかない」のたと、五年という歳月は、記憶を薄れさせるのに十分だ。ここに叔母はいない。だとしたら、「どんな工夫ができるだろう?」

見聞きするものすべてに叔母の痕跡を探す景子。そこに一本の電話が、平原夏葵という新しい関係が入ってきた瞬間、この物語は鮮やかに展開していく。(ひるね)

(一一二頁 税込一六五〇円 1月刊)

ファイティ・ピープル 新版

チョン・セラン著
斉藤真理子訳
亜紀書房



『二十四五』で受け渡されたのが『違国日記』なのだとして、その『違国日記』(第七巻)のなかに登場するのが本書だ。

目次をめくってみよう。ソン・スジユン、イ・ギユン、クォン・ヘジョン、チャ・ヤン

ソン……そこに並んでいるのは五〇人分の名

前と顔のイラストだ。本書は韓国の大学病院のまわりに生きる人々を描いた連作短編集となっている。ある人の物語がまた別の人の物語と交錯し、またその次も。群像劇の輪がころころと転がり、すれ違い、ゆるやかなまとまりが立ち現れる。

短編集というだけあって一話は短く、軽やかに読めるのだけれど、その背後にはセウォル号沈没事件などの韓国社会が抱える事件や問題が見え隠れする。ただ、そうした出来事との関わり方も五〇人分だ。単純化できない人生の断片に浸っていると、彼ら彼女らがまるで「人生の同僚」(訳者あとがきより)のように思えてくる。雑踏のなかで間違いなくとも生きている同じ人間。悲しさも愛らしさも抱え込んだ同僚たちと結ばれる感覚に、勇気をもたらせる作品だった。

それなりに長く編集委員をやっているけれど、海外作品を多く読む方ではない。まして韓国文学を読む機会はずっと逃してきて、これが私の初めて読んだ韓国文学になる。その出会いがチョン・セランのこの愛おしい物語で、幸運だったと思う。海を隔てた隣の国に生きる人々の文学をもっと読んでみたいと思うようになった。ほら、物語の力は国境なんて軽々と飛び越えていく。(浅煎り)

(四九〇頁 税込二四二〇円 11月刊)

チーヴァー短篇選集

ジョン・チーヴァー著
川本三郎編 川本三郎訳
ちくま文庫



たどえば、こんなやりとり――

「水爆かと思ったわ」彼女はいった。

「ただのケーキだよ」彼はいった。」

たどえばこういう奇妙さがチーヴァーの持ち味だ。(神経質な性格とはいえ) 郊外の住宅街でつつがなく暮らす夫婦が、深夜のキッチンでこんなにも噛み合わない会話をしているとは、近所の人は絶対に思っていない。

たどえば、こんな書き出し――

「私の家族は精神的な結びつきが非常に強い。父は私たちが子どもどきヨットの事故で溺れ死んだ。」

また、噛み合わない感じ。二つの文――家族の絆と父の死――が、当たり前のようにつなげられている。見過ごしてしまおうと思えばそうもできる、すこしだけねじれた感じ。

ざっくり言うと、彼が描くのは二〇世紀後半のアメリカ郊外住宅地の豊かで平穏な暮らしと、その裏にひそむ暗さ、そして不条理といつかことなる。この短編集に収録されて

いるのも基本的にそういった作品群だ。

とはいえ、そう簡単にまとめて分かった気にさせてはもらえないのがチーヴァーの魅力なのだ。彼の作品は、不条理という単語も困った顔をしてしまうほどのほんものの意味わからなさで我々を唖然とさせる。そして、豊かさの暗い側面を見つめながらもその余韻は必ずしも暗いものではない。

チーヴァー世界の虜になってしまったあなたには、村上春樹が編訳したもう一冊の短編集『巨大なフジオ／泳ぐ人』もぜひ手に取ってみたい。

(三三六頁 税込二二〇円 12月刊)

エテリオピア物語(上)

ヘリオドロス著
下田立行訳
岩波文庫



殺害されたばかりの死体で埋め尽くされた浜辺。横たわる若者と、彼を見つめる女神のごとき美貌の娘。宴会の跡と金銀財宝はそのまま残されている。ここで一体何が起こったのか？ 二人は何者なのか？ 謎が謎を呼ぶ、古代ギリシア小説の最高峰。

「今しもつららかな一日が明け……」(荒砥)

古代地中海世界において主流の文学作品は韻文であり、散文は歴史や哲学などの著作に用いられる形式であった。(我々が想像するような)小説が現れるのは、ホメロスやアテナイの悲喜劇、ヘレニズム文学を経て、紀元前後になってからである。他にも『ダフニスとクロエ』(ロンゴス作)などいくつかの作品が現存するが、『エテリオピア物語』の技巧は頭一つ抜けている。

本作の魅力は、古代ギリシア世界の枠組みのなかで編み出される近現代の小説のような複雑な時系列、何重にもなった語りの構造をもつ高度な叙述である。一方ではあたかも推理小説のような謎とその解明を繰り返し、起きた出来事や語られたことがテンポよく結びついていく。また他方ではホメロスやエウリピデスといった古典古代の作品を彷彿とさせ、ギリシアの神話的世界を醸成する。

古代ギリシアの文学は、たいてい読者に神話伝統に関する知識を要求する。訳注と本文を絶えず突き合わせて読むことも多い。しかし、本作はそうした前提知識がなくとも楽しむことができる。下巻も併せて古代ギリシア世界への入り口としておすすめしたい。

さて、夜が明け、物語の幕が上がります。

(三〇八頁 税込二〇〇円 10月刊)

法城を護る人々

松岡譲著

法蔵館文庫



「虚偽と無慚で固めた生活を繰りかえず寺院の徒。それをまた良心もなく批判もなしに育ててゆく檀信徒。法城を護る人々の生活はこうして下に向かつてほとんど停止するところを知らない有様である。」

真宗大谷派末寺の後継ぎとして生まれた主人公は、寺院制度の腐敗に葛藤し、父親と対立する——本作の梗概をこう記せば、それはそのまま作家・松岡譲の生い立ちと重なる。夏目漱石の弟子にして、芥川龍之介・久米正雄らと同人誌『新思潮』に筆名を並べた彼の自伝的大作が復刊を果たした。

御遠忌も、大説教者も、法主の下向も、「命がけな真摯さはどこにもない」。主人公の批判的なまなこを通して、信仰を金儲けの手段に貶める醜態を徹底的に描ききる。しかし彼の潔癖な視線は自身の矛盾や欺瞞も見逃さない。「自分の生活をもって裏打ちしない思想は要するに鉛の兵隊さんだ。戦う力もないみてくれだけの玩具じゃないか」。崇高な

理想か、現実の生活か。どちらが真の人生なのか。寺生まれという特殊な運命を描き、浩瀚な仏教的描写に彩られながらも、多感な青年の葛藤は、自らと真剣に向き合うがゆえに、誰しも的人生と共鳴する。

同窓の芥川は、書きかけの原稿の隣で死んだように眠る松岡の姿を印象的に追想している（あの頃の自分の事）。「彼は眠りながら睫毛の間へ、涙を二ばいたためてゐた」。寺を継ぐことを拒み、名前まで変えて、作家として生きることを選んだ松岡譲。その涙の裏側にがしのげれる。

（五二八頁 税込二二〇〇円 11月刊）

メアリ・シエリー

『フランケンシュタイン』から共感の共同体へ

シャーロット・ゴードン著

小川公代訳 白水社



「フランケンシュタイン」の名は誰もが耳にしたことがあるだろう。怪物を生み出した科学者の名であり、一八一八年に出版されたゴシック小説の表題である。近代における『プロメテウス』『フランケンシュタイン』とその被造物たる怪物——（アシモフ曰）

メフィストフェレス的な心報天罰神は、文学史上あまりに強烈なモチーフを打ち立てた。だが一方で、その作者自身に焦点を当てられることが、はたしてどれほどあっただろうか。彼女の名はメアリ・シエリー。フェミニズムの先駆メアリ・ウルストンクラフトと、急進的政治思想家ウィリアム・ゴドウィンの中に生まれた彼女の生涯はある意味で、女性であることの政治性を一身に引き受けるものであった。母の死、義母との確執、夫パーシーとの出会い、流産や死別など、波乱に満ちた彼女の実人生から、本書はその諸作品を紐解いてゆく。『フランケンシュタイン』の枠物の外部に潜むマーガレットの存在、『マチルダ』における父娘の近親相愛的愛の葛藤など、登場人物の分析を通して浮かび上がるのは、女性としていかに生きるかという問題意識、性や社会を取り巻く構造的規範との間で相克する女性たちの姿だ。その作品の真価は、メアリ・シエリーというファインダー越しに眺めることで初めて立体的に捉えられる。

本書はいわば、十九世紀社会を生きた一人の女性の批評的伝記だ。シェンダーという相のもと、作者と作品——創造主と被造物の間に働く相互作用を映し出し、女性作家メアリ・シエリーの全体像に迫る。（投稿・猫尾）

（二〇二頁 税込二四二〇円 12月刊）

ぼくの文章読本

荒川洋治著

河出書房新社

タイトルに注意し

よう。本書はあくま

で「ぼく」の文章読

本。普通の文章読本



とは一味違う。文章を書くときの心得や文章

を読むときの作法を教えてくれるのが普通の

「文章読本」だが、本書はそうした理論や作

法を教えてくれるわけではない。「文章」と

いうテーマとゆるやかにつながった荒川洋治

の文章が計五五編並ぶ。ぼくたちはそれをた

だただ読んでいく。そしてそこから何かを学

び取る。「背中を見て学ぶ」というのに近

く。とはいえ、そのゆるさとは裏腹に、一編

編の深度はかなりのもの。とくに大事なこ

が書かれていると感じたのは「散文」という

題の文章。多くの人に情景をまっすぐ伝える

のが散文の使命だが、「谷間の道を三人の村

人が通る」のを見たとき、人は本当に「谷間

の道を」「三人の」「村人が「通る」という

ふうに順序立てて知覚するのだろうか。荒川

はそう問う。そこには「三」「村人」「谷間」

というふうに進む人もいるはずだ。しかし散

文は情報を伝達するために、その個人的な知覚を抑え込んで「谷間の道を三人の村人が通る」と書くことになる。「個人の認識をまげて、散文はできあがる」。散文はその理路整然とした佇まいとは裏腹に、異常なものなのである。しかし詩は違う。それは「個人の感じたものを、どこまでも保とうとする」。それゆえ「異様な、個人の匂いがそこにたちこめる」。だが本場に異様なのは詩と散文のどちらなのか。これは本場に大事な問いだと思う。

素朴なゆるい言葉は時に鋭い批評的な言葉よりも核心をつく。本書がその例だ。(ばや)

(二四〇頁 税込二四七五円 11月刊)

知の図書館情報学

ドキュメント、アーカイブ、

レファレンスの本質

根本彰著 丸善出版



一度でも図書館に

足を運んだことのある

人なら誰でも、な

ぜ、こんなにも書物

が多いのかと考えたはずである。この世のすべての知の相互関係を再現するためだ、と答

えると言いつ過ぎだろうか。この問いに正面から取り組んでいるのが図書館情報学である。

本書は、図書館情報学の碩学が四〇年以上にわたる思索の末に生み出した、この分野の一級品の入門書である。歴史と現在の事例を縦横に「参照」し、書物を通じた知の構築、書物同士の結びつきが生む知のネットワークの形成、図書館がそこで果たす理論的役割などを論じている。ニュートンの研究から国会図書館の最新の動向までを論じる内容の豊富さから、実際の図書館運営に関わる人だけでなく、社会科学一般における知の産出に関心のある人にも勧められる一冊となっている。

図書館情報学に関する専門・入門書は、近年日本で多く刊行されており、隆盛を迎えていると言える。それは、もはや書物以外を通して知を獲得することが当たり前となった情報グローバル化の時代に、では書物や図書館にどんな意義があるのかという逼迫した関心の反映でもあるだろう。その一方で、あらゆる知が同質的に流通するわけではなく、現

にインターネット上では、知の信頼性の覇権をめぐる争いが絶えない。こうした状況下で、書物や図書館は、いかにして知の流通や信頼性と関与してきた、あるいはしているのか。

本書は、図書館情報学を取り巻く問題系の広がりの中でこの問いを捉え、向き合うための重要な布石となるだろう。(投稿・倉井)

(三四四頁 税込四一八〇円 10月刊)

責任と物語

戸谷洋志著

春秋社



「責任」と聞くと、他者から咎められるような気がして身が縮こまってしまふ。

だから、「人の意志なんて疑わしくないですか？」行為を人に帰属させて責任を取らせると、聞いても「責任を引き受ける」ことは次のように定義される。それは、私がしたことを——その良し悪しに関わらず——確かに私のしたことだと認めることだ、と。

なるほど、「責任」という言葉は、当初考えていたよりもずいぶんさっぱりしているようだ。だとしても、なぜそれを引き受ける必要があるのだろうか？ それは、あなたがあなたであるためなんだよ、と筆者はいう。私たち人間はそれぞれ固有の物語を持っている。そして、同じく固有の物語を持つ無数の他者

と関わりながら、日々行為している。ただしその行為は、どんなに考え抜いた先のものでしても、時として思いがけない事態を招いてしまふ。それは、他者がどんな反応をするか完全に想像しきることができない以上、仕方ないことだ。その中で他者と折り合いをつけて生きていくためには、自らの責任を引き受けて行為を振り返り、物語を編み直すことが必要だ。私が私として生きるとは、物語を指針として行動することに他ならない。

読み終えて本を閉じる。少し胸が軽くなるのを感じた。

(二三四頁 税込二二〇〇円 1月刊)

(投稿・白橋つむぎ)

戦争の思想史

哲学者は戦つたことをどう考えてきたのか

中山元著 平凡社



「正義の戦争」と「不正義の戦争」が区別されていた古代から、現在進行形で発生しているロシア・ウクライナ戦争まで……。戦争の歴史と、それを批判し平和を目指した思想史の歴史を、古代、中世・近世、近代、現代の四つの時代に分けて辿る一冊で

なっている。そして本書の面白さは、単純に戦争を批判している思想家だけではなく、戦争の必要性について論じている思想家も取り上げている点にある——ヘーゲルなどが良い例である。

そもそも古代では、国家の形成と戦争は不可分の関係性であった。そこから宗教やアイデンティティの問題、そして地政学的理由などにより、戦争は増していく。そして、近世ころから戦争に対する法哲学をはじめとする様々な哲学的な見解が出現する。戦争の倫理について議論されるのは近代に入ってからであり、現代においては戦争の要因がより複雑化し、経済や軍事、文化、情報など様々な側面が関わるようになるのだ。

哲学者の思想やその歴史的潮流を主題としているため、多少はわかりにくさを感じる部分もある。しかし、戦争の定義を明記し、ここまで多くの思想家の主張を時系列で描いている著書は、日本語文献ではあまり見られない。哲学や戦争などに興味のある人はもちろん、避けるべきであるという共通認識がある「戦争」という営みが何故様々な技術も発達した現代においてまで人々を苦しめているのか疑問に思っている人にも一読の価値がある一冊。

(三三六頁 税込三三〇〇円 2月刊)

(1)フナチ

大量死と探偵小説

笠井潔著

星海社新書

大戦間期の英米では、後世に残る探偵小説の傑作が数多く発表された。ミステリ史全体を見渡しても際立って質と量が両立していたこの時期を、探偵小説の黄金時代と呼ぶ。けれどもいったい何が、この時代の作家たちにあれほどの傑作を書かせたのか？

著者の答えは、世界大戦の惨禍である。近代兵器の登場、塹壕戦の経験。《産業廃棄物にも等しいボロ屑のような死骸の山》。その無機質で大量の死は、探偵小説が人間の死をパズルの駒として扱う下地を生む。けれども一方で、匿名的で無意味な死体の山は、意味ある死、特権的な死を人びとに希求させた。探偵小説とは、目の前に転がる死体に物語を与え、形式でもあるのだ。英米の探偵小説に黄金期をもたらしたこの仕組みは、第二次世界大戦後、日本でも繰り返されることになる。笠井潔による過去の探偵小説論から再録・再編した本書は、「大量死理論」として知られる彼のこうした史観を概観できる一冊だ。ときに普遍的と思われてしまふこの形式の時代性を、笠井は別括する。

(二五六頁 税込二四八五円 10月刊)

(水炊き)

象徴天皇の実像

「昭和天皇拝謁記」を読む

原武史著 岩波新書

大元帥から象徴へ。戦後、昭和天皇は何を思ったのか。一九四九年から五三年にかけて側近が著した「拝謁記」から、天皇の素顔と象徴制の実態が浮かび上がる。母・皇太后節子との確執、皇太子明仁への不安……等身大の人間としての天皇像を、研究の第一人者が解説する。

外国観、人物観、宗教観など、テーマごとに記述が整理されるなかで、やはり興味を引くのは戦争や軍事に関する考えた。開戦の発端は軍部の「下剋上」であり、天皇自身は平和を望んでいた……という話がよく知られる。しかし張作霖爆殺事件や二・二六事件に対しては悔恨を滲ませる一方で、終戦後も朝鮮戦争など共産主義国家の動向を警戒し、再軍備を主張する。朝鮮半島に対しては差別的な発言も目立つ。旺盛に政治を語る様子からは、戦中の意識が抜けきらないことが窺える。

戦後八〇年。国際情勢の悪化に呼応して改憲や防衛強化が叫ばれる今日は、あの頃と地続きだ。昭和一〇〇年の節目に、戦争と平和を考え直すすがたを。

(二五四頁 税込二〇五六円 10月刊)

(くたくた)

東アジア現代史

家近亮子著
ちくま新書

新書の特徴である手軽さ。それを容易く裏切っていくこの厚み(五一二頁)。まるで辞書のように長く手元に携えておける新書も、また独特の味わい深さがある。

「〇〇史」と銘打たれた新書は、得てしてそうした息の長い魅力を持っている。本書『東アジア現代史』は、日本・中国・朝鮮・台湾・香港の近代から現代に至るまでの一五〇年の歴史を一挙に眺望できる一冊だ。

道を違えた近代化の過程、大戦と冷戦構造下での各地域の戦略。私たちが生きるこの東アジアの辿ってきた複雑な経緯が手際よく整理され、その密接な繋がりが浮かび上がる。また、急速な少子高齢化、教育の歪みと広がる格差、歴史認識の対立など、東アジアが共通して抱える社会課題についてもコンパクトに解説されているのもありがたいところ。

歴史とは一国の中だけで生み出されるものではない。複数の糸が複雑に絡み合った結果としての「現在」だ。この一冊が本棚にあるだけで、いつでも、いつまでも過去と未来を取り出せる。

(五一二頁 税込一五四〇円 1月刊)

(浅煎り)

家父長制をめぐる東アジアの葛藤

家父長制という男性が支配的な地位を占める社会システムは、日本に限らず東アジア全体に深く根付いている。儒教文化や近代国家形成の中で社会構造に入り込んだ男性優位のジェンダー観は、様々な格差や差別、暴力を生んでいる。中国や韓国状況について耳にすることはあるが、人びとの個人的な感情に触れる機会はあまりない。同じ東アジアに生きる人間として彼女／彼らの個人的な経歴に目を向けると、自らのうちに抱えている葛藤を共有できるだろう。

二〇一五年、中国で地下鉄やバスでの痴漢行為を非難するステッカーの配布を計画した五人の活動家が逮捕された。李麦子、武嵘嵘、鄭楚然、韋婷婷、王曼。女性の抑圧を訴えるパフォーミング・アートを展開していた五人は、逮捕報道を契機にフェミニスト・ファイブ（女権五姉妹）と呼ばれ注目を集める。彼女たちは家父長制的権威主義の国家体制に異を唱えるシンボルとなり、国内で芽生えつつあった政治的運動を覚醒させた。『フェミニスト・ファイブ 中国フェミニズムのはじまり』は、ジャーナリストとして長年活動家たちと交流してきた社会学者が、中国のフェミニズム運動が国家体制を揺るがすほどに活性化した理由に迫る一冊だ。

一人っ子政策の失敗から女性に出生を奨励する共産党は、女性を男尊女卑が根付く伝統的家族観に押し込めようとしていた。こうした中でインターネットの普及は人権意識の拡大に貢献し、各地でセクハラや性加害を糾弾する声が高まった。そして、二〇世紀から続く労働運動が女性たちの運動に呼応する。こうしてフェミニズムは、共産党の体制を脅かすほどに大きな潮流になったのだ。

著者はジャーナリストとしての経験を活かし、五人をはじめとす

る活動家たちの生の声を鮮明に記録する。父から暴力を受けていた母の記憶、女の子だからとあしらわれ進学や就業など望むような自己実現を阻まれた過去といった、個人的な——同時に家父長制的な抑圧に起因する——体験を、彼女たちはそれぞれに持っている。ありふれた暴力だからこそ、抵抗の声は社会に響き、共鳴したのだ。

父長制に異を唱えるフェミニストの運動はしばしば強烈な反発を受ける。『韓国男子——その困難さの感情史』は、韓国におけるバックラッシュの主体である男性がいかなる困難を抱えているかを理解することを試みる。著者のチェは彼らの状況をこう形容する。

「韓国男子は、その始まりから現在に至るまで、ただの一度も理想的な自己像を現実へと具現化することができなかった。さらに、その失敗をつねに別の社会的弱者、特に女性のせいにしてきた」。



本書は、韓国の近現代史を男性の境遇という視点から再構成し、男性性がいかに形成されてきたかを描きます。日本の植民地支配はイエ制度を導入し、男性に家長として家族を支えることを強いた。

朝鮮戦争と現在まで続く徴兵制は兵役のため身を犠牲にする男性」と「好き勝手に暮らす女性」という対立を生む。熾烈な経済的競争に敗れた家長の役割を果たせない男性たちは女性嫌悪を強めていった。こうした大きな文脈だけでなく、本書は、流行語やネットミーム

といったサブカルチャーにも目を向ける。生々しく浮き彫りにされる対立は、現代日本のSNS上の言説と瓜二つだ。二冊の示す東アジアの現実を、日本にも通じる問題を鋭く突きつける。（たいやき）

やがて過去になるいまのために——『負けイン』を語る

最近、ライトノベルを読み始めた。理由はいろいろあるけれど、気晴らしになるというのが一番だ。良い意味で軽く、すいすい読めて、面白い。わけても最近のお気に入りには、雨森たきび著/いみぎむる絵『負けヒロインが多すぎる!』（ガガガ文庫）である。昨年にはアニメ化もされた学園コメディで、シリーズは現在、番外短編集を含めて八冊刊行されている。『綴葉』らしくはないかも知れないが、この場を借りて紹介させてほしい。

◆恋が終わっても、物語は終わらない

主人公となるのは、ひとりぼっちを謳歌する読書家の少年・温水和彦。ある日彼はクラスメイトの女子・八奈見杏菜が失恋する現場に立ち会う。そこで八奈見の愚痴を



聞いてやったことを呼び水にしてか、気が付くと彼の周りには、八奈見と同じように失恋した少女たち——通称『負けヒロイン』が集まり始めるのだった。ずっと好きだった幼馴染に恋人ができてしまった陸下部女子・焼塩檸檬。逆に、好きな先輩とその幼馴染との関係に割り込むことができない文芸部女子・小鞠知花。恋に敗れても人生は続く——。自らの思いに決着をつけようとする少女たちの物語に、お人好しの温水は巻き込まれてゆく。

視点は基本的に温水少年であるものの、本作の読み味は群像劇のそれに近い。キャラクターのひとりひとりに物語があり、それらが絡まることで小説は展開される。先の読めないその賑やかさは、まるでヒリヤードのようだ。すれ違い、ぶつかり、跳ね返りながら、少女少女たちは収まるべきところ——それぞれの結末に収まってゆ

く。けれどもその営みは終わることがない。《俺たちは仮初めの繋がりをも、繰り返しつつかんで手離して生きていく》と温水は云う。《それは寂しいけど悲しいばかりじゃない、そんな気がする——》。

◆時は流れない、それは積み重なる

本作は、その基調こそコメディタッチなのに、不思議とエモーションナルで、切ない。それはメインテーマに失恋があるからだろうけれど、もっと言えば、そのような失恋も、あるいは友情も、どんな勝利も、敗北も、バカ騒ぎも、やがては過去になってゆくと意識に全体が貫かれているからだろう。

過去は決してなくならない。恋に敗れたからといって、恋していた自分まで失われるわけではない。……たとえそれが、人生を懸けた恋だったとしても。これは一面では残酷なことだ。八奈見は十年以上思い続けていた幼馴染を、転校生に奪われてしまった。恋に生きていた過去を抱えて、それでも八奈見は生きるほかない。あのとき行動に出なければ、彼の隣にいたのは自分だったのかもしれない——そんな後悔を抱えても、過去は変えられない。

けれどもその不可逆はまた、救いにもなるだろう。過去は変えられないからこそ、他の誰にも奪われることなくそばにある。そんな過去の積み重ねのうえで、人間は生きているのだ。たとえ敗れた恋だとしても、《好きになって良かった》と云える日が来るならば、それは素敵なことだろう。そして一切が過去になるがゆえに、われわれは「いま」を懸命に積み重ねるのである。

気軽に手に取ったライトノベルに、ぼくは思いがけず励まされた。重たい学術書のあいまに、あなたもいかがだろう。

(水炊き)

編集後記

朝露です。今号で『綴葉』編集委員を辞す
るということで、2年ぶりにこちらでご挨拶
させていただきます。お世話になりました編
集委員および関係者の皆様、そして何より読
者の皆様、本当にありがとうございました。

ここ『綴葉』で、私は気の赴くままに本を
選び、書評を書いてきました。つまり私個人
は、どこか偏ったまま歩くことが許されてい
たのです。それでもそんな編集委員が集まる
と、隣にはいつも自分に書けない書評が並び、
誌面全体のバランスというものが形づくられ
る。そのうち、自然と自分の強みを伸ばした
り、新しいスタイルに挑戦したりしたくなっ
てくる。そうした一歩一歩が、幸せをもたら
しながら、私を少しずつ良い方向に変えてく
れました。皆とバタバタは(たぶん)してい
なかったし、締切には毎月苦しんでいたのに、
それでもここは安心できる居場所でした。

唯一の心残りは、この居場所を隠れ家にし
てしまっていたことです。小恥ずかしくても、
もっと周りに宣伝すればよかった……だって、
こんなにも誇らしい雑誌なのだから。

今後は陰ながら、『綴葉』を広めて応援し
ていこうと思います。『綴葉』の未来が、朝
の陽に照らされた露のように、輝いたものと
なりますように！ (朝露)

当てよう！ 図書カード

3月は春のように暖かくなったかと思つた
らまた冷え込んで、関東では雪が降ったそう
です。春の雪——なごり雪というやつでしょ
うか。さて、それにちなんで問題です。「な
ごり雪」といえば同題の楽曲が知られていま
すが、これを歌っているのは次のうち誰？

1. クジラ
2. イルカ
3. カモメ
4. ウミネコ

(水炊き)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、
生協のひとことポストに投函してください。
下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも
可能です。正解者の中から5名の
方に図書カードを進呈いたします。
応募締め切りは5月15日です。



《12月号の解答》 12月号の問題の正解は、2.
の108でした。諸説ありますが、有名な由来
として、108は煩惱の数を表しており、鐘を
鳴らすごとに煩惱を取り除くという願いがあ
るそうです。図書カードの当選者は、いわさ
ん、猫猫にゃんにゃんにゃんさん、ねこねこ
555さん、よっさんさん、とんぼさんの5名
です。当選おめでとうございます。(筏)

読者がらひついで

○京大を舞台にした漫画や小説がいくつがあ
ると思うので、どれくらいあるか知りたいで
す。(工学研究科教職員・ねこねこ555)

——言わずもがなの『四畳半神話大系』や
『夜は短し歩けよ乙女』、『鴨川ホルモー』。漫
画で言えば一・二月号で取り上げた『ヨシダ
檸檬ドロップス』に、『数字であそぼ』。さ
らにはライトノベルで『異世界エルフと京大
生』と多種多様にありますね。話はズレます
が北海道大学獣医学部がモデルの『動物のお
医者さん』や神戸の大学生生活がメインの『神
戸在住』など、大学生が中心の物語は独特の
雰囲気が漂う名作が多くて良いですよ。ね。
○年末なので編集委員さんの一年間のベスト
を知りたいです。

(人間・環境学研究所・はげ)

——特集で年間ベストのようなテーマは扱っ
ていないのでたしかに気になりますね。昨年
出版の本でなく申し訳ないのですが、個人的
には『図書館の魔女』シリーズを読んで衝撃
を受けました。言葉が主題のファンタジーで
すが、政治、軍略、都市、文化、シユブナイ
ル、と充実した内容の上文章も凝っています。
今夏続編が出版されるらしく是非。(筏)